札幌医療生活協同組合
在宅療養支援診療所 ホームケアクリニック札幌

ほすぴ通信

年　報

Vol. 5
2013年7月～2015年6月

札　幌　医　療　生　活　協　同　組　合

ホ　ー　ム　ケ　ア　ク　リ　ニ　ッ　ク　札　幌

前野　宏　院長

「戦後 70 年と地域包括ケアシステム」

今回は、ほすぴ通信にはあまり似つかわしくないタイトルですが、日本人の「最期の場所」について考えてみたいと思います。

太平洋戦争も終盤になって昭和 20 年の終戦の年になると、日本本土が戦場となりました。広島、長崎ではある日突然、一瞬のうちに多くの日本人が命を落としました。沖縄では住民の住み慣れた土地が戦場となり、全ての物が破壊されました。そして多くの民間人が米軍の攻撃により命を落としたり、より凄惨なのは日本軍の足手まといになるということで、自決を強要され、失われた命も多かったのです。

このように書いてきても、実際の戦争を知らない私にとっては、本当の悲惨な状況は分かっていないのだと思います。そのような時代がつい 70 年前にあったのだということを私達は忘れてはいけないと思います。そのような過酷な時代に生きていた日本人に比べて、現在の日本人はどんなに幸せなことでしょう。もちろん、死はいかなる人にとっても避けることができない宿命ではありますが、少なくとも今の日本人には自分の死ぬ場所を選ぶことができる自由があります。そのことは感謝しなければならないでしょう。

しかし、今後我が国においては自分が死ぬ場所を選ぶ自由が危うくなる可能性があるのです。急激な少子高齢化社会を迎え、いわゆる「2025 年問題」と言われる問題があります。団塊の世代と言われる終戦直後に生まれた世代の日本人が 75 歳以上となるのが 2025 年なのです。しかし問題はさらにその後にやってきます。2040 年には日本人の死亡数が年間約 160 万人以上になり、最高となるのです。その数は 2015 年より 36 万人の増加になると推測されています。

短期間のうちに死亡する人が急速に増加するとどうなるでしょうか。そこに起こるのは日本人が最期を迎える場所の確保という問題です。

戦後しばらくは日本人が死ぬ場所はほとんどが自宅でした。その後、急速に病院で亡くなる割合が増え、1977 年にその数が逆転します。その後は病院死がどんどん増え、現在では日本人の約 8 割が病院で最期を迎えているのです。しかしここに来て、政府は医療費の抑制のために病院のベッド数を減らそうという政策を進めています。すなわち、病院のベッドはできるだけ急性期の患者が病気を治すために使用し、病気が慢性化し、終末期になった場合には生活の場で過ごしてもらうという政策です。つまり今後自宅や介護施設での看取りを増やそうとするのが政府の政策なのです。その中核となるのが、最近にわかに脚光を浴びている「地域包括ケアシステム」です。多くの高齢者は何らかの障害や病気を持っているのが当たり前ですから、彼らがそのたびに病院に行くと病院のベッドはすぐにパンクしてしまいます。それで、急性期の治療が終わり、病気が慢性化したり、認知症になった方々はできるだけ地域でみるように、さらにそういった方々を地域で看取ることを目指しています。地域包括ケアシステムは地域ごとにそのような方々の受け皿になる多職種のネットワークを作ることを目指しているのです。札幌市でも現在、行政や医師会が主導して地域多職種ネットワークを作ろうとする動きが盛んです。

私はこの方向性自体は間違ってはいないと思うのですが、短期間で充実したシステムを構築できるかどうか非常に疑問です。

当院が 7 年前から行っている「在宅緩和ケア」では、終末期がん患者さんが最期まで家で過ごすことをサポートするシステムの構築を目指してきました。7 年間で約 350 人の末期がん患者さんを自宅や高齢者施設でお看取りしてきたのですが、患者さんのご家族がしっかりケアをされたケースが大部分でした。つまり患者さんを支えるご家族がいれば患者さんは最期まで家で過ごすことが可能なのです。今後の問題は、そういったご家族がいない方をいかに自宅であるいは高齢者施設で最期まで支えることができるかということです。特に終末期まで関わることができるヘルパーの養成は今後、喫緊の課題になると思います。また、私達のクリニックで現在活動を開始した在宅ホスピスボランティア「葉っぱの会」の働きも今後重要になってくると思われます。

昨年の 2014 年 10 月に北海道新聞社から刊行されました。

～編著者「はじめに」より～

本書は、できるだけ自宅で過ごしたいと願っている患者さんとその家族のために書きました。この本を読んでいただければ、たとえ末期がんになっても家で過ごすことは可能だということがわかっていただけるでしょうし、患者さんをケアする家族にとっては、この本を参考にしていただくことによって、自信をもってケアに臨むことができると思います。

また、この本は一般の人ばかりでなく、医療・介護・福祉の専門職の方々にとっても、在宅緩和ケアの実際を知っていただくうえで非常に役立つものと思います。

昨年の刊行以来、数々の患者さんとご家族から"参考になった"との声をいただいています。訪問診療が開始されてから、ご家族が関心を示されて読まれるケースが多いですが、中には書店などで本を目にしたことをきっかけに、当院の診療を希望されてきた患者さんご家族もいらっしゃいました。お看取りを含め現実的なことが多く書かれているため、読後に辛いお気持ちになってしまうのではないかと気になるところでしたが、「これからのことがわかって安心しました」「最期まで自宅で過ごしていけそうです」と反響は想像していた以上でした。この先たどる経過や介護の実際など今後の展望を知ることは、最期まで自分らしく生きたい・生きることを支えたいと思っている方々にとって大事な要素なのだと改めて感じています。
更に多くの方々に役立つことを願っています。　（文：熊田）

【 概 要 】

《開　設　日》　2008 年 7 月 1 日　札幌市清田区にて開設
　　2012 年 11 月 1 日　札幌市白石区本通 5 丁目北 1-1 へ移転
《診 療 科 目》　内科・緩和ケア内科
《訪 問 範 囲》　札幌市全域、江別市
《研修施設認定》　日本緩和医療学会　認定研修施設
《関 連 施 設》　札幌南青洲病院
　　札幌南青洲病院指定居宅介護支援事業所
　　札幌徳洲会病院
　　札幌東徳洲会病院
《スタッフ》
　医　師　院長 前野宏
　　常勤 藤原葉子
　看 護 師　師長 梶原陽子
　　常勤 熊田美香　泉里昭予　直井由利子　小栗由子　北村由香里　金澤美和
　　休職 田中ひとみ(緩和ケア認定看護師)
　ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ　主任 提箸秀典　下倉賢士
　ｸﾗｰｸ　荻原正美
　ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　非常勤　竹生礼子

【 実 績 】

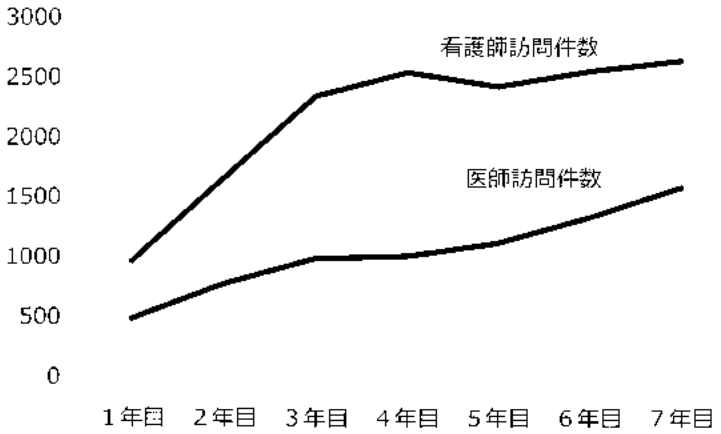
1、全体の実績

数値は「がん」と「非がん」の合計を示す　　（　　）内の数字は合計に占める「非がん」の数値

		相談件数	退院時 ｶﾝﾌｧ	延べ患者数	うち新規患者数	訪問件数 医師	訪問件数 看護師	在宅看取り数 ※施設含む
1～5年目の年平均	2008年7月～2013年6月	176 (19)		123 (33)	86 (9)	1358 (453)	2685 (669)	48 (6)
6年目	2013年7月～2014年6月	199 (18)	44	112 (6)	88 (3)	1437 (76)	2852 (270)	67 (5)
7年目	2014年7月～2015年6月	222 (18)	53	132 (9)	103 (4)	1659 (46)	2848 (177)	71 (0)

2、がん患者のみの実績

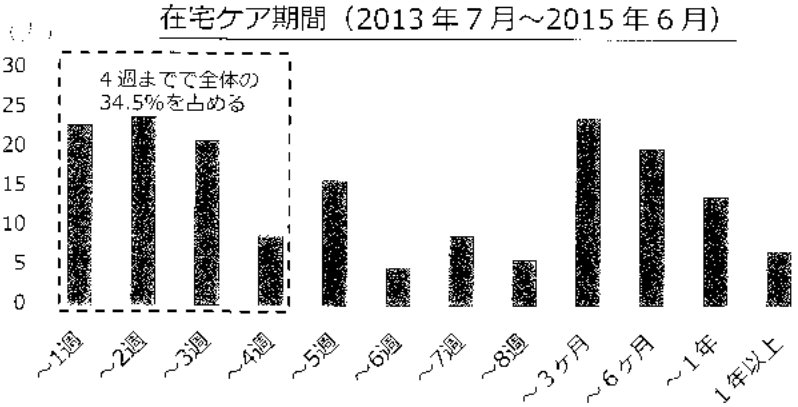
訪　問　件　数



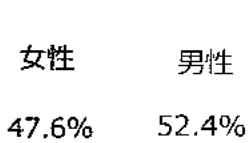
患　者　転　帰

	6年目 2013年7月～2014年6月	7年目 2014年7月～2015年6月
在宅看取り	62人 (75.6%)	71人 (73.9%)
入　院	20人(24.4%)	22人(22.9%)
中　止	0	3
合　計	82	96

在宅ケア期間（2013年7月～2015年6月）



男女比

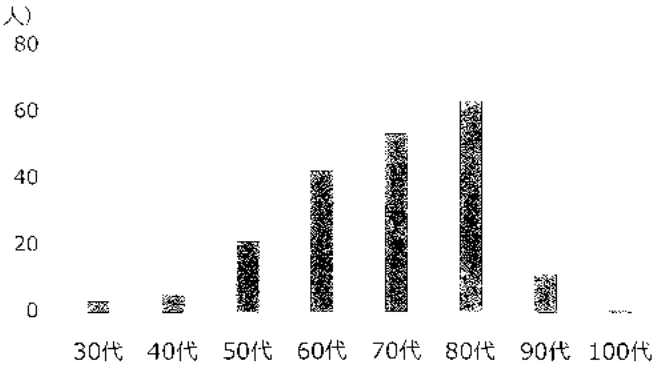


※以下すべて、2103年7月～2015年6月のデータ

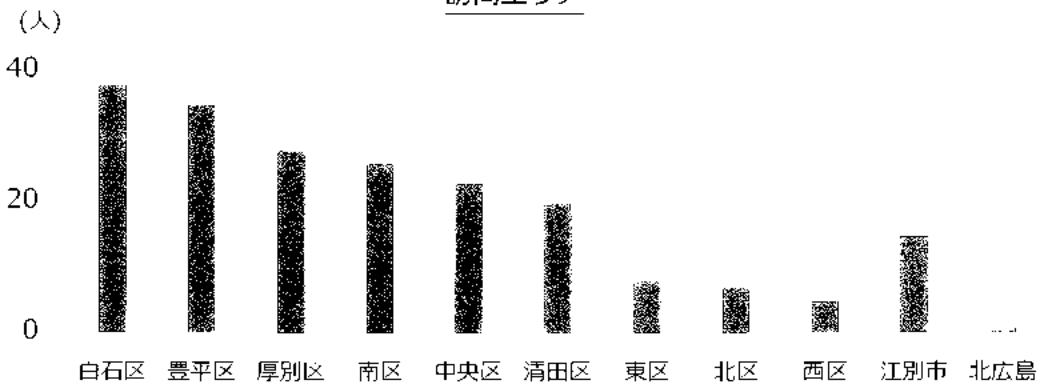
原発巣

	(%)		(%)
肺	19.4	食　道	2.4
大　腸	17.0	悪性リンパ腫	2.4
胃	15.0	腎　盂	1.9
膵	11.1	卵　巣	1.9
乳	5.8	胆　嚢	1.5
子　宮	3.8	胆　管	1.5
前立腺	3.4	肝	1.5
膀　胱	2.4	原発不明	1.0
頭頸部	2.4	その他	5.3

年代別



訪問エリア



紹介元医療機関　(敬称略)

医療機関	件	医療機関	件	医療機関	件
恵佑会札幌病院	23	ＫＫＲ札幌医療センター	9	札幌南三条病院	3
ＪＣＨＯ北海道病院	23	恵佑会第２病院	9	札幌医科大学附属病院	3
北海道がんセンター	16	勤医協中央病院	8	札幌厚生病院	3
ＮＴＴ東日本札幌病院	12	市立札幌病院	7	渓和会江別病院	3
札幌南青洲病院	11	ＫＫＲ札幌医療センター斗南病院	5	北海道消化器科病院	2
ＪＣＨＯ札幌北辰病院	10	北海道大学病院	5	札幌東徳洲会病院	2
東札幌病院	9	札幌北楡病院	4		

その他の医療機関：
石橋胃腸病院、恕しの森内科・消化器内科クリニック、江別市立病院、在宅総合診療クリニック中央、札幌外科記念病院、札幌中央病院、札幌徳洲会病院、札幌ひばりが丘病院、札幌山の上病院、さとわ内科クリニック、佐野内科医院、佐分利内科医院、白石中央病院、仁楡会病院、手稲渓仁会病院、道北勤医協一条通病院、平岸本町内科クリニック、伏見内科、北海道医療センター、やまと診療所

当院診療と連携した訪問看護ステーション　(敬称略)

訪問看護ステーション恵佑会、勤医協訪問看護ステーションもなみの里、訪問看護ステーションはばたき、訪問看護ステーションかりぶ、訪問看護ステーションおおあさ、訪問看護ステーション白ゆり新札幌、訪問看護ステーション禎心会北、札幌白石訪問看護ステーション、来夢ライン訪問看護ステーション、訪問看護ステーションポプラ栄町、訪問看護ステーション春、訪問看護ステーション「ことに」、新札幌パウロ病院訪問看護ステーション、訪問看護ステーションなずな

【 活動業績 】（２０１３年7月1日～２０１５年6月３０日）

講演

月 日	主催・依頼者	催事名/テーマ	講師
2013/ 8/ 3	ＫＫＲ札幌医療センタ	がんを考えるカルチャ 講座	前野
2013/ 6/ 7	市立小樽病院	小樽・後志緩和医療研究会	前野
2013/ 9/14	在宅ホスピスボランティア 市民公開講座	在宅ホスピスについて	前野
2013/ 9/17	八軒中央地区 民政・児童委員協議会	在宅緩和ケアについて～末期がんでも自宅で過ごす為に～	提箸
2013/ 9/21	呼吸器科内科学会地方会	札幌市における在宅緩和ケアの現状と課題	前野
2013/ 9/28	死の臨床研究会道支部 秋の研究会（小樽）	家族とともに自ら考える最期のとき	前野
2013/10/10	NTT東日本札幌病院	緩和ケアを深め広めましょう	前野
2013/10/23	公益社団法人北海道看護協会 留萌支部	在宅緩和ケアについて	前野
2013/10/24	公益社団法人北海道看護協会 留萌支部	その人らしく生きるための看護-緩和ケアの理解と家族の関わりを学ぶ研修会	田中
2013/11/17	札幌肺がん市民フォーラム	肺がん患者の在宅緩和ケアの現状と課題	前野
2014/ 1/25	北海道いのちの電話	在宅ホスピスで大切にしていること・ホスピスのこころ	前野
2014/ 2/ 8	第5回北海道がん医療心身ネットワーク研究会	在宅緩和ケアにおけるこころのケア～日々の関わりを通して～	田中
2014/ 2/20	北海道消化器科病院	在宅緩和ケアの実践より	前野
2014/ 2/23	心身医学会講演	在宅緩和ケアの現状と課題・患者さんの傍にいるということ	前野
2014/ 8/27	一般社団法人北海道ソーシャルワーカー協会中央A支部	在宅医療・介護連携における多職種協働のポイント～がん患者と非がん患者の支援を通して～	提箸
2014/ 9/20	第13回 能登地区がん診療連携協議会	在宅緩和ケアの現状と課題	前野
2014/ 9/23	北海道医療ソーシャルワーカー協会	2014年度フォローアップ研修会ソーシャルワークの原理原則Ⅲ	下倉
2014/ 9/27	旭川市在宅医科歯科連携学術講演会	終末期における在宅ケアの必要性	前野
2014/10/11	苫小牧アカヘーの会	教えて在宅緩和ケア ～がんになっても家族ですごすために～	前野
2014/10/15	平成26年度在宅療養支援推進フォーラム	在宅緩和ケアと看取りの支援から	前野、山中
2014/10/17	いきいき福祉・健康フェア2014	がんになっても大切なご家族と自宅で過ごすために	田中
2014/10/25	第5回北海道在宅医療推進フォーラム	がんになっても最期まで家で過ごすために	前野
2014/11/23	第10回在宅医療推進フォーラム 名古屋	～新しい地域社会の創造に向けて～	前野
2014/11/29	北海道医療ソーシャルワーカー協会	実践講座～終末期医療におけるソーシャルワーカーの役割	下倉
2014/12/17	市立二笠病院	教えて在宅緩和ケア ～終末期患者の隣人になるために～	前野
2014/12/ 4	北海道医療大学	ソーシャルワーク演習Ⅰ	下倉
2015/ 1/ 7	北海道医療大学	医療ソーシャルワーク実践論	下倉
2015/ 1/24	KKR札幌医療センター 斗南病院	患者、家族の希望の生き方を支える意思決定支援	田中
2015/ 5/16	第58回北海道ソーシャルワーク学会	学生企画「学会参加の心得とは～研修発表の上手な聞き方」	下倉

講義

月 日	依頼者	講義名など	講師
2013/ 7/11	ヘルパーステーションたけうち	看取り期のケア	梶原
2013/ 7/17	白石区通所サービス連絡会	緩和ケアにおける事例報告	田中
2013/ 7/30	北海道大学大学院薬学研究院	医療薬学講座 ～在宅医療を中心に～	前野
2013/ 8/16	旭川医大CNSコース	がん緩和医療 在宅緩和ケアを中心に	前野
2013/ 9/23	がんセンター緩和ケア研修会	地域連携と療養の場所の選択	前野
2013/ 9/26	平成25年度訪問看護師養成講習会	訪問看護技術、ターミナルケア（終末期ケア）	田中
2013/10/ 2	看護協会緩和ケア研修会	終末期ケアと倫理的諸問題	前野
2013/10/ 6	NTT緩和ケア研修会講師	地域連携と療養の場所の選択	前野
2013/10/12-26 2013/11/9-16	在宅ホスピスボランティア養成講習	在宅緩和ケアの概念の理解、終末期の体の変化 ボランティアとしての心得	前野・竹生 梶原・提箸
2014/ 2/25	北海道大学病院講義 12-2ナースステーション	在宅療養におけるがん看護の実際と病棟看護師との連携	梶原
2014/ 3/16	恵佑会緩和ケア研修会	地域連携と療養の場所の選択	前野
2014/ 5/10	天使大学院	ホスピス緩和ケア看護学特論Ⅲ	田中
2014/ 5/23	天使大学院	ホスピス緩和ケア看護学特論Ⅲ	前野

月　日	依頼者	講義名など	講師
2014/ 5/24	天使大学院	ホスピス緩和ケア看護学特論Ⅲ	田中
2014/ 6/13	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	自分の死を考える	前野
2014/ 6/20	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	終末期患者の全人的苦痛について	田中
2014/ 6/27	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	チーム医療とコミュニケーション	提箸
2014/ 7/ 4	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	緩和ケアについて	前野
2014/ 7/19	日本リフレクソロジスト養成学院札幌校	解剖生理学　リフレクソロジ　に役立つ身体のしくみ	梶原
2014/ 8/ 1	旭川医大看護学科修士課程	がん緩和医療　～在宅緩和ケアを中心に～	前野
2014/10/ 3	公益社団法人　北海道看護協会	終末期ケアと倫理的諸問題	前野
2014/10/ 4	NTT緩和ケア研修会	がん緩和医療　～在宅緩和ケアを中心に～	前野
2014/10/13	がんセンター緩和ケア研修会	がん緩和医療　～在宅緩和ケアを中心に～	前野
2014/11/13	ウィステリア17	看取りへの支援	田中
2014/11/27	札幌市南区地域包括支援センター	看取り期のケア	田中
2015/ 1/22	ヘルパーステーションはばたき	お看取りのケア	熊田
2015/ 3/15	第7回　恵佑会札幌病院緩和ケア研修会	緩和ケア概論他	前野
2015/ 4/21	おおあさ訪問看護ステーション	末期がんの特徴と看取り期のケア	熊田
2015/6/5･19	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	自分の死を考える	前野
2015/ 6/19	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	終末期患者の全人的苦痛について	前野
2015/ 6/19	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	チーム医療とコミュニケーション	梶原
2015/ 6/26	北海道文教大学ＰＴ・ＯＴ１年目総合教養講義	緩和ケアについて	提箸

学会等発表

月　日	学会・研究会	演題	発表
2013/11/2･3	第37回　日本死の臨床研究会年次大会	終末期がん患者の通所サービス利用の現状と課題	梶原
2014/9/19～21	第19回日本緩和医療学会学術大会　神戸	在宅緩和ケアにおける多職種の役割と連携	前野
2015/ 5/16	第58回北海道医療ソーシャルワーク学会	保険医療機関における臨床参加型実習の具体的な取り組みについて	下倉
2015/ 5/17	〃	生きる意味を喪失した肺癌治療後の患者に対するＡＣＰを活用したソーシャルワーク実践	下倉
2015/6/18～20	第20回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	痛み止めがのめなくなったらどうする？	前野

著作、メディア等活動

月　日	内容	担当
2013/11月	ＮＨＫ取材	前野
2013/12月	保健の科学12月号　㈱杏林書院　地域に暮らす人々を支える在宅ケア㈱	田中
2014/ 1月	季刊誌「カイ」第22号　㈱ノーザンクロス　家族のために、最後にできること	前野
2014/ 9月	北海道新聞社　教えて在宅緩和ケア　出版	前野
2015/ 5月	日本医療企画　取材、同行	前野

研修・実習受け入れ

医師　　研　　沖縄中部徳洲会病院　2名、名古屋徳洲会病院　1名、函館共愛会病院　1名、
北海道がんセンター　1名、岸和田徳洲会病院　1名、福岡徳洲会病院　4名、
沖縄南部徳洲会病院　1名、くまさんクリニック　1名、旭川厚生病院　1名、
大隅鹿屋病院　2名、湘南厚木病院　1名、庄内余目病院　1名、衣笠病院　1名

看護師　学生実習　天使大学院（緩和ケア実習）2名、北海道医療大学看護学科　7名
湘南藤沢徳洲会病院　1名、北海道がんセンター　2名
天使大学院（看護栄養研究科看護専攻）1名、PCCNS実習　2名

見　　学　　教育大付属中学校　1名、禎心会東訪問看護ステーション　1名

在宅ホスピスボランティア

在宅ホスピスボランティア「葉っぱの会」　　ボランティア・コーディネータ　竹生　礼子

在宅ホスピスボランティア「葉っぱの会」は、在宅で緩和ケアをうけながら療養している方とご家族の「最期まで自宅で暮らしたい」「最期まで自分らしくありたい」という願いの実現のために、市民が支援者として活動するグループとして発足しました。ホームケアクリニック札幌のケアチームに市民が一員として参加し、活動しています。

これまでに、何人かの療養者やご家族に出会い、日常生活の中のちょっとしたお手伝いをしてまいりました。ご家族の外出中の見守りや部屋の中の整理など、ご家庭を訪問させていただいてのサポートや外出の手伝い、誕生日カードづくりや便利な介護用品の製作など、活動内容は療養者やご家族の必要性に合わせてさまざまです。

ご自宅で療養されていたある方は、「ずっと家にいたいから」と最期の日々のぎりぎりまで私たちボランティアを受け入れてくださいました。他人を自宅に入れることに躊躇があり、なかなか支援を求めることができない人が多いのが現状ですが、この方は、ご自分で家の中の整理をしたいというご希望を叶えるために、ボランティアを活用してくださったのです。

療養される方は、支援の受け手になるばかりではなく、私たちボランティアに活動の機会を提供して下さる、支援の提供者でもあります。相互の支え合いの上にこの活動が成り立っていることを実感しました。

定例会での話し合いの様子

また、ある方はサポートに伺う前に病状が変化し、支援につながりませんでしたが、ご家族は、ボランティアの訪問体制ができたことにより在宅療養継続の決定ができたと話していました。サポートする市民の存在が、人々の在宅療養を支えることになるのだと思います。これからも、多くの人が最期まで生き生きとその人らしい人生を生ききることができるよう、「葉っぱの会」は、学習を積みながら、活動を続けていきたいと思います。

Aさんをサポートして　　葉っぱの会　ボランティア　　長井　万里子

療養者さん・ご家族に受け入れて頂き、ボランティアとしての存在を与えられました。受け入れにはクリニック・クリニックスタッフ・コーディネーターへの信頼があってこそであり、信頼は勇気・決断を促すものだと気づきました。今回、支援することは支援されることだと、あらためて実感し、多くの方に支えられて実現できましたこと、すべてに感謝です。感謝は時間の経過とともに深く・広く、自身の人生への感謝にもなっています。「生きていることは多くの支えがあってこそ」と支えられてきた人生を想います。「いのちのメッセージ」をご夫妻から預けていただきました。大切に「いのちの糧」として育んでいき、応えていければと思います。皆様に深謝です。

ボランティア作成の便利用品

Bさんのサポート活動リポート　　葉っぱの会　ボランティア　　中村　則夫

車の乗り降りもスムーズで安心しました。ご本人と娘さんお二人のご感想は…「何年分かのたくさんの花が見られて、とてもうれしかった。」「寒くもなく暑くもなく、天気も良くてありがたかった。」　ご希望は「大通りの花フェスタ会場を歩いてみたい。」ということで、2時間半を超える散策となりました。ちょうど最後の会場に入って来るのを見つけ、遠くからそっと眺めていると、母娘で花の一つ一つを一心不乱に見ながら語り合っている様子がわかりました。周りに気を取られずに、お二人の世界に没頭していらっしゃるんだなぁ、と思いました。娘さんは、花をバックにお母さんの写真をたくさん撮っていらっしゃっていたようです。最後のコーナーのきれいな青い花々の前で、お二人ご一緒の写真をお撮りしました。当初今回のサポートでは、大通りへの行き帰りを車でお送りするだけの短いふれあい時間を物足りなく感じていました。しかし、会場でのお二人のご様子を拝見していて、とても大切な時間をバックアップさせていただいていると気付き、何時になるとも目処のつかない待ち時間の不安な気持ちも吹っ飛んでしまいました。ステキなサポートの機会をいただきありがとうございました。

ソープカービングの誕生日プレゼント

ご遺族のお言葉

佐藤　ヨシ子様　より

ミニコンサートの想い出

夫が闘病生活八年目に入り、抗がん剤の使用も中止し、昨年三月よりホームケアクリニック様にお世話になりながら、好きな音楽、草花、絵などを楽しみながら過ごしておりました。ある日先生から、ボランティアでアンサンブルグループ奏楽さん達による自宅でのコンサートのお話を頂きました。遠慮したのですが再度お声をかけて頂き、七月十八日好天に恵まれたコンサート日和に実現致しました。自宅に、ピアノ、バイオリンを持ち込み素敵なステージ衣装に着替えられ、小さな居間に入場です。先生や看護主任さん、家族六名の観客でしたが、大拍手です。素晴らしいミニコンサートの始まりでした。夫の大好きなベートベンから始まり、クラシックを数曲、リクエストにプレスリーなど、最後にマイウェイが流れましたら、夫は一緒に口ずさみ歌っておりました。穏やかな優しい顔でした。娘、孫、私も涙、涙でした。点滴のみの生活の中、何も夫にしてあげることが出来ないむなしさの中、本人は勿論のこと、家族も苦しい辛い日々でしたから、この日のコンサートは心身共に癒されました。本人も『キタラまで行かなくとも病気したお蔭で生演奏が自宅で聴けるなんて幸せだなー』と言って、その一ヶ月後の八月二十七日、音楽でも聴いているかのように静かに眠るように永眠致しました。７８歳でした。この想い出は、家族のアルバムの中の大切な１ページで決して忘れることはないでしょう。
お忙しい中、自宅まで足を運び素晴らしい演奏をお聴かせ下さいました。アンサンブルグループ奏楽様、クリニックの皆様に、家族一同心から感謝致します。

佐藤さん宅で開かれた演奏会後の写真です。
執筆してくださったヨシ子さんが前列中央におられ、その後ろに優しく微笑んでおられるのがご主人です。前野院長の後ろの棚に並んでいるのはクラシックやジャズ、映画音楽を中心としたＣＤです。音楽を愛していた方でした。

奏楽さんのご紹介！！

『奏楽(そら)』さんは、札幌および近郊在住の若手演奏家の方々と、札幌交響楽団オーボエ奏者の岩崎弘昌さんによって 2008 年に結成されたアンサンブルグループです。中学生時代から札幌交響楽団の演奏を聴いていた前野院長が岩崎さんとご縁があり、ミニコンサートを患者さん宅で開催していただけるという、夢のようなお話が実現しました。これまでの３年間に、７件のお宅で素敵な演奏会が開かれました。それぞれの方がどのように感じられたか私たちに計り知ることはできませんが、生で聴く音楽の素晴らしさ、そして、そばで一緒に聴いている家族の温かさを感じ、一時でも病のことを忘れる時間となっていたのではないかと思います。(文:熊田)

新しい仲間スタッフ紹介

2015年4月にクリニックに入職し、はや半年が経過しました。

医師

藤原　葉子

患者さんのお宅を訪問し、かけがえのない時間を共有させていただく日々、幸せのお裾分けをしていただく日々に感謝する毎日です。私は、1994年に信州大学を卒業し医師になりました。卒業後は麻酔科医として、総合病院に勤務しました。多忙な日々に充実感を覚える一方で、医師を志した時に目指していた「まちのお医者さん」から遠ざかっている事への焦燥感がありました。時が流れ、2008年のこと、ある患者さん・ご家族との出会いが、私に緩和ケアを一生の仕事とするように、指し示してくれました。緩和ケア内科に転向し、患者さんのみならず、5年後には件(くだん)の患者さんのご主人もお約束通りお看取りさせていただきました。以前勤務していた病院では、緩和外来・病棟・訪問診療と、緩和ケアに関わる全ての診療を行っていましたが、いつか、訪問診療だけを行えたら幸せだろうなあ、と夢見ていました。今、その夢見る環境で、前野院長をはじめとして素晴らしいスタッフと共に、一人一人の患者さんとしっかりと関わることができることを本当に幸せに感じています。どうぞよろしくお願いいたします。

始めまして。2014年8月からクリニックに看護師として仲間入りさせて頂きました小栗由子(おぐりゆうこ)です。

看護師

小栗　由子

看護師暦は20数年と長くありますが、緩和ケアにしっかりと携わらせて頂くのは初めてで、毎日お会いする患者さんやご家族はもとより、先生をはじめとしたクリニックスタッフ皆さんに沢山のことを教えていただきながら奮闘しています。

わたしは、数年前に実際にクリニックの皆さんに支えられながら母を自宅で看取った経験をしました。その時に受けた、緩和治療や看護の衝撃と感動が忘れられず、この経験をいつの日にか患者さんを通してお返しできたらと漠然と考えていました。ありがたいことに縁あってこうして働かせて頂いています。

まだまだ勉強中の身ですが、これまでの経験も生かしつつ関わらせて頂く一瞬一瞬を大切に頑張っていきたいと思います。

昨年秋よりクリニックの仲間として一緒に働かせてもらっています。

看護師

北村　由香里

緩和は初心者の私に、出来る出来ないではなく、したいとかやるためにはどうしようと思う気持ちがあればいいのですよと、前、田中師長の言葉に励まされここにいます。振り返ると15年前、当時働いていた病棟で友人の子供が脳腫瘍で亡くなり、お家とご両親が大好きだった娘さんが、病院のベッドで最後を迎えざるを得なかった姿が忘れられませんでした。当時は、在宅緩和ケアという概念が医療スタッフにも患者さんにも一般的ではなかったのです。今、在宅緩和ケアの場で、患者さんの「家で過ごせてよかったです」という言葉、悲しさ、つらさ、憤りや、ちょっとした歓びを、ご本人とご家族とほんのひと時でも分かち合い、患者さんとご家族のお力に励まされ、私が力を頂き感謝する日々です。この道を選んでよかったと思っています。未熟な私が泣きたくなる時は、そっと暖かなスタッフが励ましてくれる中で、患者さんとご家族の支えになれるよう歩みたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

今年10月より仲間入りさせていただきます。

看護師

金澤　美和

緩和ケアは初めての経験ですが、今まで病院での勤務の中で、在宅を希望される患者様やご家族と関わり退院調整を行う事もありました。その中で、在宅に戻られた患者様が病院とは違う住み慣れた生活環境の中で、ご家族との時間を過ごされることでその人らしい時間が過ごせたとの話しをうかがうこともあり、在宅、緩和ケアについて学びたいと思いました。このたび、新たな道を歩みだそうと思い入職させていただくこととなりました。スタートに立ったばかりの私で未熟者ですが、在宅でケアされている患者様、ご家族の過ごされる時間の一部に参加させていただきたいと思います。今までの看護師としての経験とこれから学んでいくことを生かせるよう頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

医療ソーシャルワーカー

下倉　賢士

新たな気持ちを持って

私は2014年10月よりホームケアクリニック札幌の仲間に加えていただきました。今までは、同じ法人である札幌南青洲病院で医療ソーシャルワーカーとして14年間働いてきましたが、新しい場所、新しいチームに入るということで、新人のようなフレッシュな気持ちで働き始めました。そして、働き始めてすぐに、たくさんの新たな気づきを得ることができました。

最初に感じたのは、人生の最終段階を自宅で過ごす患者さんやご家族がすごくキラキラと輝いているということでした。どうしてこんなに輝いているのだろうと考えていると、ある患者さんから「家は最高だよ。大好きな家族に囲まれて、好きな時に好きなことができるのだから。」ということを聞きました。また、あるご家族からは、「家に帰ってきて本当によかった。不安なことはたくさんあるけれど、それも含めてみんなで団結してやっているという感じがいい。病院では先生や看護師さんに任せっきりだったから。」ということを聞きました。このように、いろいろな話を聴かせていただき、家で過ごすと言うことは、その人が家族も含めて最も自分らしく生活できる場所であるということ、医師や看護師が主体ではなく、本当の意味で患者さんとご家族が主体となれるということなのだと解釈しました。だから、こんなにも輝いているということがわかった気がします。次に感じたのは、クリニックで働いている各職種がそれぞれ強い絆で結ばれているということです。もちろん患者さんやご家族とも強い信頼関係が構築されています。それぞれが高い専門性を発揮し、きめ細かなコミュニケーションを取りながら、患者さんやご家族のその人らしい生活に向かって支援しているということです。一見当たり前のようですが、そのようなチームを作っていくことは容易ではありません。それを実現しているのは、それぞれの職種が個々で努力していることは当然ですが、何よりも「ホスピスのこころを大切にするクリニック」という理念を一人一人が常に持ち、その理念の共有がベースにあるからだと思います。

このような気づきを得て、私もこのチームの一つのピースとなり、自宅で過ごしている患者さんやご家族の力になれるように日々努力していきたいと思っております。

看護師長

梶原　陽子

小さな一歩が大きな歩みに繋がることを願って

戦後70年の節目である今年の夏、全国で様々な祈念式典やイベントが行われていました。戦争体験を語り続けてきた方々の高齢化に伴い、戦争の記憶が風化してしまうことを懸念し、戦争を知らない世代の若者達が体験を語ってもらい、その物語を語り継ぐ取り組みがなされています。
次世代に戦争の記憶を繋ぐことに真摯に向き合っている若者達の姿がとても印象的でした。"命どぅ宝"（ぬちどぅたから）という沖縄の方言があります。「命こそ宝」という、反戦のスローガンとして知られる言葉です。"天命が輝くような生き方をすることが人生にとって大切である"ということを示唆しています。
私がこの言葉を知った時、"緩和ケア"との共通点が胸に浮かびました。"死"は決して避けることができないもので、お別れの時はどんな人にも必ず訪れます。そんな人生の終末を自分らしく生きることができ、ご家族はご本人らしさを大切にしながら見送れたとしたら、その後の人生を歩んでいく遺された方にとって大きな糧になるのではないでしょうか。
ホームケアクリニック札幌では終末期の患者さんが最期まで穏やかに住み慣れたご自宅で過ごすことが出来るように、患者さんとご家族をチームでお支えしています。人生の終末の大事な時間を共に歩ませて頂くことは、医療者としての大きな責任も感じますが、傍らに居ることを認めて頂ける喜びや感謝で溢れています。日々患者さんとご家族から成長の機会を与えられていることに感謝し、スタッフ一人一人が"今、自分の出来ること"を見つめ、懸命に取り組んでいます。
クリニックが7周年を迎えた今年、私が看護師長として襷を引き継ぐことになりました。私自身は非力ですが、前野院長始めチームの仲間やクリニックを支えて下さっている皆様方のお力を頂きながら、患者さんご家族と共に歩んでいきたいと思っています。

Home Care Clinic
Sapporo

札幌医療生活協同組合　在宅療養支援診療所
ホームケアクリニック札幌

〒003-0027　札幌市白石区本通5丁目北1-1
TEL 011-867-6770 FAX 011-867-6771
Mail: homecaresapporo@space.ocn.ne.jp
URL: http://homecare-sapporo.com/

2015年11月1日発行